

# 諏訪後古墳群

一般国道354号道路改良事業地内  
埋蔵文化財調査報告書

平成20年3月

茨城県銚田土木事務所  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第303集

# 諏訪<sup>す</sup>後<sup>わ</sup>古墳<sup>うしろ</sup>群

一般国道354号道路改良事業地内  
埋蔵文化財調査報告書

平成20年3月

茨城県銚田土木事務所  
財団法人 茨城県教育財団

## 序

茨城県は、市町村や県の枠を超える広域的な交流と連携を進めるため、また、県土の均衡ある発展を支える基盤として、県土の骨格となる一般国道や主要地方道などの幹線道路網の整備を進めております。

このたび、茨城県鉾田土木事務所は、行方市山田地区において、一般国道354号道路改良事業を計画しました。この事業予定地内には、埋蔵文化財包蔵地である諏訪後古墳群が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県鉾田土木事務所から埋蔵文化財の発掘調査について委託を受け、平成19年6月から7月まで発掘調査を実施しました。

本書は、諏訪後古墳群の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県鉾田土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、行方市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成20年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 人見 實 徳

## 例 言

- 1 本書は、茨城県鉾田土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成19年度に発掘調査を実施した、茨城県行方市山田2,566-6ほかに所在する諏訪後古墳群<sup>すわのしろ</sup>の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。  
調査 平成19年6月1日～平成19年7月31日  
整理 平成19年8月1日～平成19年8月31日
- 3 発掘調査は、調査課長瓦吹堅のもと、以下の者が担当した。  
首席調査員兼班長 藤田哲也  
主任調査員 井上琢哉
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、主任調査員井上琢哉が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、石碑及び古銭の実測については、祭主の高柳孫一郎氏に御協力をいただいた。

## 凡 例

1 地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、X軸=+9,840m、Y軸=+63,000mの交点を基準点(A1a1)とした。この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらにこの大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構	TM-古墳	SD-溝	SK-土坑	
遺物	P-土器	DP-埴輪	Q-石製品	M-古銭
土層	K-擾乱			

3 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

4 遺構及び遺物実測図の掲載方法については次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1、各遺構の実測図は80分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は原則として埴輪は4分の1、土器は3分の1、古銭は原寸の縮尺で掲載した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

■ 溝

●・○・▲・■ 埴輪片・土器片

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は、m・cm、kg・gである。なお、現存値は（ ）で、推定値は[ ]を付して示した。

(2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号については、土器、拓本のみ記載の土器片、土製品、石器・石製品、金属製品・古銭ごとに通し番号とし、本文・挿図・写真図版を記した番号も同一である。

6 「主軸」は、埴または竈をもつ住居跡については埴または竈を通る軸線を主軸とし、その他の遺構については長軸・長径を主軸とみなした。主軸方向は、軸線が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した。(例 N-10°-E)。

## 抄 録

ふりがな	すわうしろこふんぐん							
書名	諏訪後古墳群							
副書名	一般国道354号道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第303集							
著者名	井上 琢哉							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL.029-225-6587							
発行年月日	2008（平成20）年3月24日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
すわうしろ 諏訪後古墳群	いばらきけんりょうしやうだいしやん 茨城県行方市大字山 田2,566-6ほか	08233 - 424008	36度 04分 48秒	140度 31分 09秒	3 ~ 5 m	20070601 ~ 20070731	519㎡	一般国道354号 道路改良事業に 伴う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
諏訪後古墳群	古墳	古墳	古墳 溝跡		3基 1条 円筒埴輪、土師器片（壺）、石碑 （十九夜観世音、道祖神）		1基の古墳は、 近世以降に塚と して利用されて いる。	
要約	当遺跡は、低地に築かれた群集墳の一部と考えられる。3基の古墳とも周溝が確認された。出土した埴輪から古墳時代後期と考えられる。また、塚については頂上部に祀られた石碑には「天保十二丑」と刻まれていることから、少なくとも近世以降には塚として利用されていたといえる。							

# 目 次

序

例 言

凡 例

抄 録

目 次

第1章 調査経緯 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査経過 .....	1
第2章 位置と環境 .....	3
第1節 地理的環境 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	3
第3章 調査の成果 .....	6
第1節 遺跡の概要 .....	6
第2節 基本層序 .....	6
第3節 遺構と遺物 .....	7
古墳時代の遺構と遺物 .....	7
(1) 古墳 .....	7
(2) 溝跡 .....	16
第4節 まとめ .....	17
遺構全体図 .....	20
写真図版	

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県鉾田土木事務所は、行方市山田地区において交通の円滑化を図るために一般国道354号道路改良事業を進めている。

平成18年5月2日、茨城県鉾田土木事務所長から茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道354号道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。

これを受けて茨城県教育委員会は、平成18年5月18日に現地踏査を、平成18年8月10日及び平成19年2月7日に試掘調査を実施し、諏訪後古墳群の所在を確認した。平成18年8月28日、茨城県教育委員会教育長は茨城県鉾田土木事務所長あてに、事業地内に諏訪後古墳群が所在する旨、回答した。

平成18年10月18日、茨城県鉾田土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成18年11月21日、茨城県鉾田土木事務所長に対して、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成19年2月19日、茨城県鉾田土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道354号道路改良事業地内に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成19年2月26日、茨城県教育委員会教育長は茨城県鉾田土木事務所長に対して、諏訪後古墳群についての発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県鉾田土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成19年6月1日から平成19年7月31日まで諏訪後古墳群の発掘調査をすることとなった。

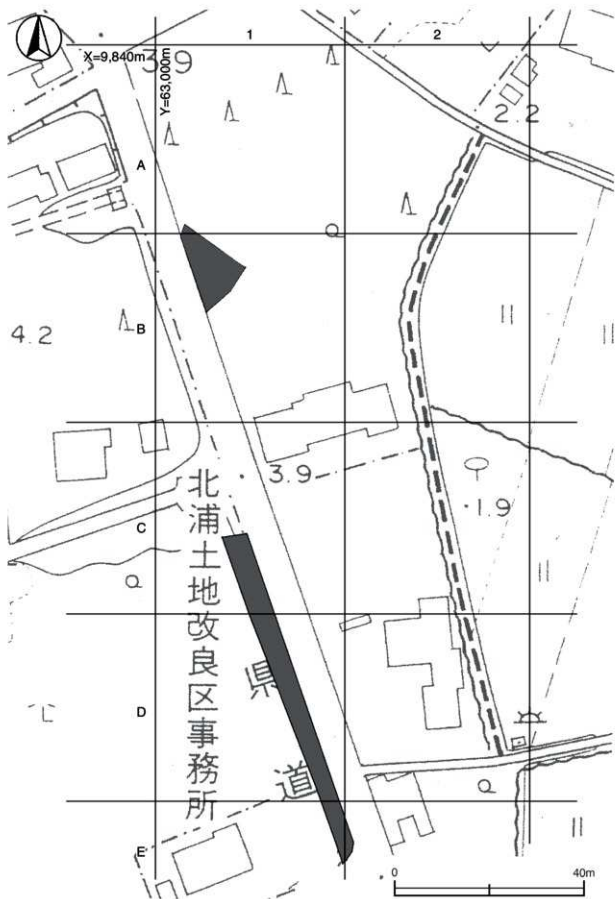
平成19年7月20日、茨城県教育委員会教育長は茨城県鉾田土木事務所長及び財団法人茨城県教育財団理事長に対して、一般国道354号道路改良事業地内に係る埋蔵文化財発掘調査の変更について協議した。平成19年7月23日、茨城県鉾田土木事務所長及び財団法人茨城県教育財団理事長は茨城県教育委員会教育長に対して、埋蔵文化財発掘調査計画の変更について同意する旨、回答した。

## 第2節 調査経過

諏訪後古墳群の調査は、平成19年6月1日から平成19年7月31日まで実施した。以下、調査の経過については概要を表で記載する。

工程	期間	
	6月	7月
調査準備 遺構確認	[調査準備と遺構確認の期間を示す横線]	
遺構調査	[遺構調査の期間を示す横線]	
遺物洗浄 写真整理	[遺物洗浄と写真整理の期間を示す横線]	
補足調査	[補足調査の期間を示す横線]	





第1図 諏訪後古墳群調査区設定図

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

諏訪後古墳群は、茨城県行方市山田2,566-6ほかに所在している。

行方市は、平成17年9月2日に麻生町、北浦町、玉造町の3町が合併して誕生した市で、利根川水系に属する霞ヶ浦と北浦に挟まれた、南北に細長く伸びる行方台地の北側半分を占めている。行方台地の標高は35～39mあり、標高2mほどの霞ヶ浦・北浦両湖の湖岸は急激な崖となっている。また、台地は霞ヶ浦と北浦に流入する中小河川とその支流によって開析されており、谷津や低地が入り込んだ複雑な地形を成している。

諏訪後古墳群は、北側を武田川に、南側を山田川に開析された舌状台地の麓で標高約4mの北浦西岸の低地に位置し、西側の台地との標高差は約30mある。現北浦湖岸までは東方に約300mであり、古北浦は当遺跡近くまで広がっていたと考えられる。現北浦は当遺跡の東方で東西幅が約400mと狭くなっており、昭和43年に架橋された鹿行大橋が行方台地と東対岸の鹿島台地を結んでいる。

当遺跡の周辺は宅地のほか、北浦湖岸の低湿地を利用した水田や蓮田が広がっている。調査前の現況は屋敷林である。

### 第2節 歴史的環境

当遺跡の所在する山田地区は、行方市北浦地区（旧北浦町）に属している。北浦地区では、縄文時代早期の遺跡から確認されている。遺跡の多くは、北浦地区を西から東に流れ北浦に流入する武田川及び山田川の流域に位置している。

応安7年（1374年）の『海夫注文』には「鳴田津」及び「山田津」の記載がある。「鳴田津」は武田川河口の行方市成田に、「山田津」は山田川河口の行方市山田にそれぞれ比定されている<sup>1)</sup>。これらの津は、その機能が古代にも遜ることが可能である。両河川は、流域に生活する人々にとってよい生活環境をもたらすばかりではなく、物資輸送にも重要な役割を担ってきた。ここでは、主に武田川及び山田川流域の古墳や当該期の集落跡について概観する。

武田川北側の台地上には4か所の古墳群が確認されている。札場古墳群<sup>2)</sup>では4基の古墳が調査されている。埋葬施設は第2号墳が横穴式石室で、他の3基からは箱式石棺が検出されている。時期は6世紀後半から7世紀末葉に比定されているが、通輪は検出されていない<sup>3)</sup>。成田古墳群<sup>3)</sup>では、7基の古墳が調査されており、時期は7世紀代から8世紀初頭に比定されている。第3号墳は周溝内径18mの円墳であり、横穴式石室の女室から馬具類や装飾金具の副葬品が出土している<sup>4)</sup>。このほか、塚原古墳群<sup>4)</sup>では5基、神平古墳群<sup>5)</sup>では3基の古墳がそれぞれ確認されている。集落跡は、木工台遺跡<sup>6)</sup>と炭焼遺跡<sup>7)</sup>の調査で古墳時代後期を中心に、それぞれ124軒<sup>5)</sup>、21軒<sup>3)</sup>の住居跡が確認されている。

武田川と山田川に挟まれた台地周辺には、当遺跡も含め21か所の古墳及び古墳群が確認されている。これらは、下流域に10か所、中流域に11か所と大きく2か所に集中している。下流域に位置するうなぎ塚古墳<sup>8)</sup>は、山田川に面した砂丘上に築造された古墳である。道路工事や宅地造成工事によって8基の古墳が埋没したとされている<sup>6)</sup>。この古墳からは直刀と石杖が出土しており、中期古墳と考えられる。中流域の台地上に位置する

堂目木古墳群(9)は、前方後円墳3基と円墳11基で構成される古墳群である。第1号墳は全長16.5mの前方後円墳で、くびれ部に箱式石棺の主体部が確認されている。石棺内からは128個の玉類が検出されており、6世紀末頃の築造と考えられている<sup>7)</sup>。また、この台地上にある今山遺跡(10)で35軒<sup>8)</sup>、六台遺跡(11)で40軒<sup>9)</sup>の古墳時代の住居跡が確認されており、後期を中心に集落が形成されていたと推測される。

山田川南側の台地上には、6か所の古墳群が確認されている。このうち、前方後円墳3基、円墳10基で構成される塚原古墳群(12)と、円墳4基で構成される鷲峰古墳群(13)は近接しているが、他の古墳群はほぼ等間隔を隔てて位置している。

※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

註

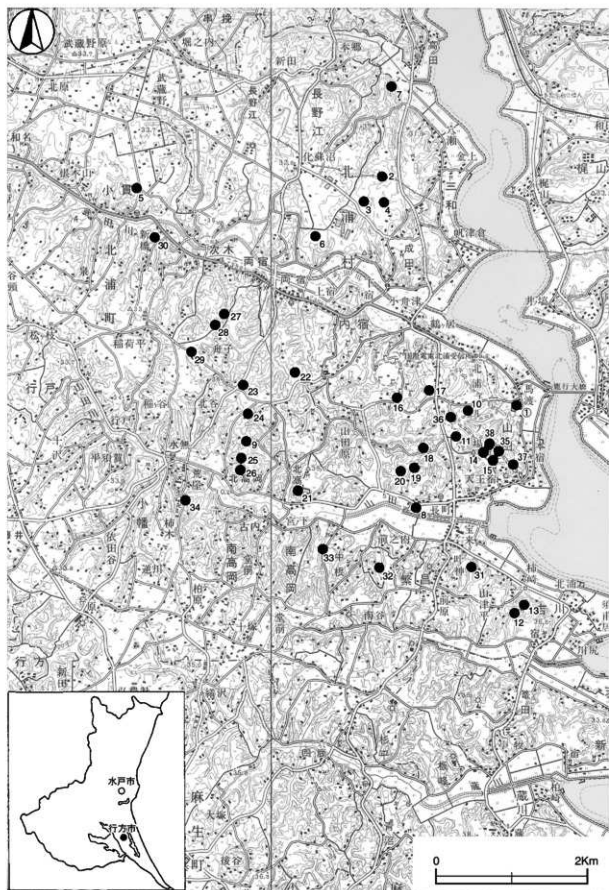
- 1) 土浦市立博物館「中世の霞ヶ浦と律宗」『土浦市立博物館第18回特別展図録』1997年2月
- 2) 黒澤秀彦「炭焼遺跡 札場古墳群 三和貝塚 成田古墳群 北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第130集 1998年3月
- 3) 註1)に同じ
- 4) ・茂木悦男「木工台遺跡1 北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第140集 1998年9月  
・荒井保雄 高野節夫「木工台遺跡2 北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第152集 1999年6月  
・高野節夫「内宿井戸作城跡 木工台遺跡3 (日本工台古墳群) 北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第153集 1999年7月
- 5) 註2)に同じ
- 6) 北浦町史編さん委員会「北浦町史」北浦町 2004年12月
- 7) 註3)に同じ
- 8) 汀安衛「今山遺跡調査報告書」山田地区遺跡発掘調査会 1990年3月
- 9) 汀安衛「六台遺跡調査報告書」山田地区遺跡発掘調査会 1990年3月

参考文献

- ・茨城県教育庁文化課編「茨城県遺跡地図」茨城県教育委員会 平成13年3月

表1 諏訪後古墳群周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世
①	諏訪後古墳群			○					20	堂入古墳群			○				
2	札場古墳群				○				21	御門山古墳群	○		○				
3	成田古墳群				○				22	鏡谷古墳群			○				
4	塚原古墳群				○				23	殿山古墳群			○				
5	神平遺跡				○				24	ドンビン屋古墳群			○				
6	木工台遺跡	○	○	○	○	○			25	大峰古墳群			○				
7	炭焼遺跡				○	○			26	地蔵後古墳群			○				
8	うなぎ塚古墳	○	○	○					27	熊ノ平古墳群			○				
9	堂目木古墳群				○				28	新堀古墳群	○	○	○				
10	今山遺跡	○	○	○	○	○			29	大塚古墳群	○		○				
11	六台遺跡	○	○	○					30	新橋古墳群			○				
12	塚原古墳群				○				31	権現山古墳群			○				
13	鷲峰古墳群				○				32	台山古墳群			○				
14	天神古墳				○				33	日光平古墳群			○				
15	千両山古墳群				○				34	小幡岩ノ内古墳群			○				
16	並松古墳群				○				35	平遺跡			○	○	○		
17	大塚古墳				○				36	古屋敷遺跡			○	○	○		
18	中山古墳群				○				37	古館遺跡			○	○	○	○	
19	京田古墳群				○				38	風早遺跡			○				



第2図 諏訪古墳群周辺遺跡分布図 (国土地理院「王造」[鉾田] 1:50,000)

## 第3章 調査の成果

### 第1節 遺跡の概要

諏訪後古墳群は、行方市の北東部、北浦西岸の標高4mほどの低地に立地している。調査前の現況は屋敷林であり、調査面積は519㎡である。

確認された遺構は、古墳3基及び古墳時代の溝跡1条である。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に4箱出土している。主な遺物は、埴輪片、土師器片(甕)、石器(石鎌)、古銭(寛永通寶)などである。

### 第2節 基本層序

調査区南西部のD1c7区にテストピットを設定し、基本土層の堆積状況の観察を行った。テストピットの地表面の標高は4.4mで、地表から約2.3m掘り下げた。土層は7層に分層され、観察結果は以下のとおりである。

第1層は、黒褐色を呈する表土層で、焼土粒子とローム粒子を微量含んでいる。粘性・締まりともに弱い。層厚は48～63cmである。

第2層は、明黄褐色を呈する砂層で、ローム粒子を微量含んでいる。粘性は弱く、締まりは普通である。層厚は15～23cmである。

第3層は、黄色を呈する砂層で、細礫を微量含んでいる。粘性は弱く、締まりは普通である。層厚は15～19cmである。

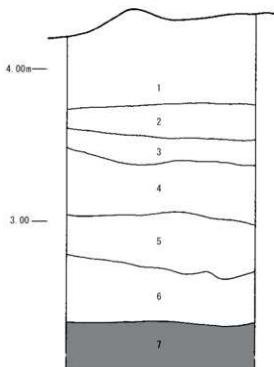
第4層は、黄褐色を呈する砂層で、細礫を少量含んでいる。粘性は弱く、締まりは強い。層厚は34～42cmである。

第5層は、明黄褐色を呈する砂層で、粘土粒子を少量含んでいる。粘性は弱く、締まりは強い。層厚は28～41cmである。

第6層は、浅黄色を呈する砂層で、粘土粒子を中量含んでいる。粘性は普通で、締まりは強い。層厚は30～43cmである。

第7層は、浅黄色を呈する砂層で、湧水層である。粘土粒子を中量含んでおり、粘性は普通で、締まりは強い。下層が未掘のため、本来の層厚は不明である。

なお、遺構の多くは第2層上面で確認され、第2～4層にかけて掘り込まれている。



第3図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、古墳3基、溝路1条が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

#### (1) 古墳

##### 第1号墳 (第4～6図)

**位置** 調査2区のB1a3～B1c4区に位置し、標高4.0mの旧北浦の海岸砂丘に立地している。

**現状** 西側と北東側を道路に挟まれた塚の頂部に3基の石碑と御神木があり、当初は塚として調査を進めた。

**規模と形状** 塚は長軸7.4m、短軸4.5mの長楕円形を呈し、高さは0.6mである。調査中に塚頂部から南へ約3.6mの位置で土坑状の掘り込みが確認され、更に南へ約6mの位置で周溝を確認したことから古墳と判断した。古墳の規模及び形状は、周溝の形状から、墳丘径が約12mの円墳と推測される。

**墳丘** 現丘は北側の一部分を残し、ほとんどが削平されている。現丘の頂部に3基の石碑(Q1～Q3)が安置されており、現在まで周辺地域の信仰の対象となっていた。Q2の直下層にあたる第3層は準大の石を積み上げた礎層であり、第3層の下部にある板石とともに石碑接地の基礎となる層である。また、第3層の上層の第1層は、塚の再構築の層である。第4層は県道敷設の際に削平されている西部以外はなだらかな盛り上がりを示していることから、墳丘の構築層下の旧表土と考えられる。なお、第2層は建造物構築による盛り土、第4層より下層は自然の砂層である。

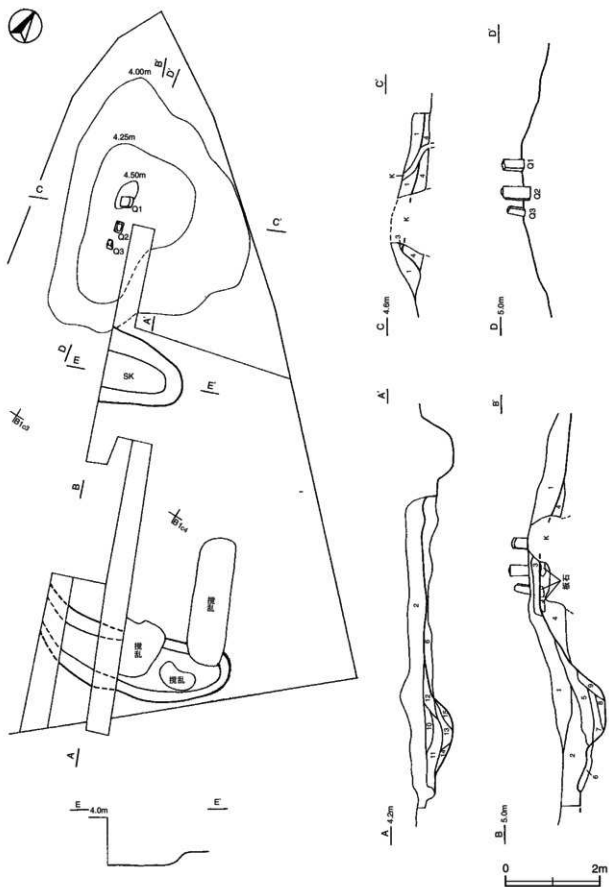
**周溝** 上幅0.9～1.4m、下幅0.4～0.9m、深さ0.1～0.5mである。上層部は、削平による攪乱の影響を強く受けて遺存状態は悪い。確認された長さは弧状に4.1mが確認されただけであり、断面形は浅いU字状を呈している。緩やかに弧を描いていることから、円形に周溝が巡っていたと推測される。

**土坑** 現丘の南側裾部から検出されている。西側は調査区外へ延びるため、東半分のみが調査され、位置と形状から土坑は主体部の可能性がある。確認できた短径は1.6mで長径は3mほどと推測され、長楕円形を呈していたと考えられる。主軸方向はN-70°-Eで、深さは0.3mほどである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上っている。覆土は3層に分層され、不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。粘土塊や石材片は確認されなかった。

#### 土層解説

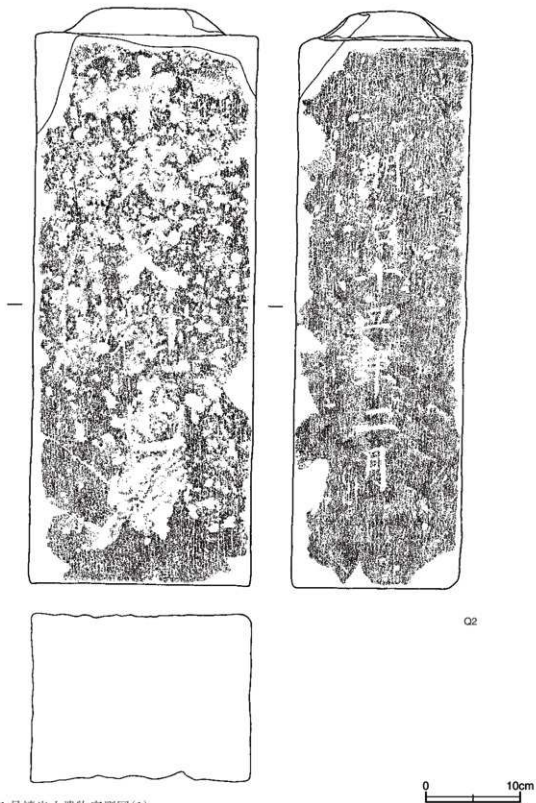
1	黒	褐	色	ロームブロック・礫・砂中量	9	褐	色	砂多量、礫中量、ロームブロック微量	
2	黒	褐	色	ロームブロック・砂多量、礫中量	10	黒	褐	色	砂中量、ロームブロック微量
3	暗	褐	色	礫多量、砂中量、ローム粒子微量	11	黒	褐	色	砂中量、ローム粒子微量
4	黒		色	砂中量、ロームブロック微量	12	暗	褐	色	砂多量、ロームブロック微量
5	黒	褐	色	砂中量、ロームブロック・礫微量	13	褐	灰	色	砂多量、ロームブロック少量
6	黒	褐	色	砂多量、礫少量、ロームブロック微量	14	黒		色	砂多量、ロームブロック少量
7	暗	褐	色	砂多量、礫少量、ローム粒子微量	15	い	黄	褐色	砂多量、ローム粒子少量
8	暗	褐	色	砂多量、礫中量、ロームブロック微量					

**遺物出土状況** 土師器片2点(甕)、石器1点(石錘)、石製品3点(石碑)、古銭2点(寛永通寶)が出土している。土師器片は現丘の覆土上層から出土しており、細片である。Q1、Q3は道祖神である。Q1の正面左下に「高柳ヶ孫七」、右側面には「天保十二丑 正月吉日」の銘があり、建立者及び建立年月と考えられる。Q2は「十九夜観世音」の銘があることから、庚申塔である。建立時期は「明治十四年二月」である。Q4は石碑下層の礎層中からの出土であり、石碑の基礎構築の際に集められた礫に混入していたものと考えられる。M1、M2は礎層上層から出土しており、賽銭と考えられる。



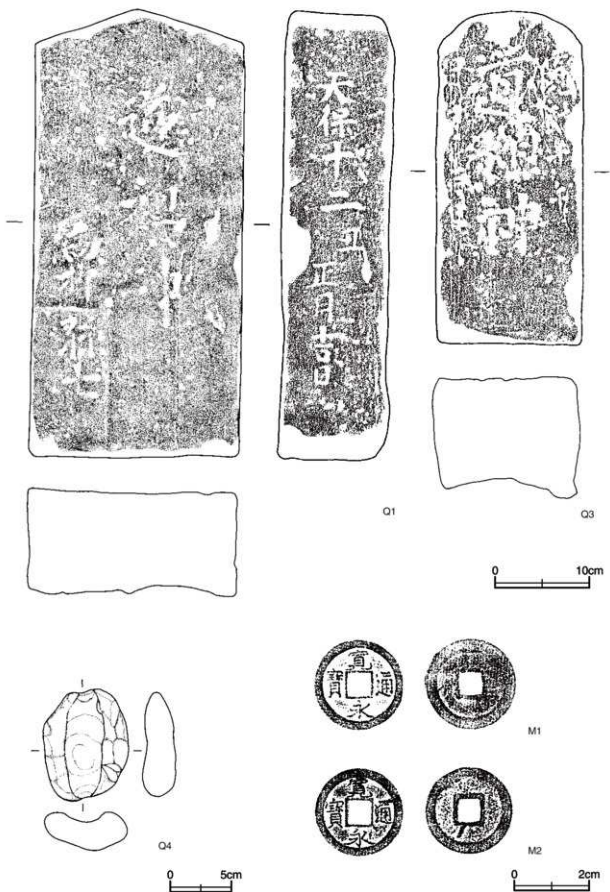
第4图 第1号墳实测图

所見 主体部と考えられる土坑や周溝が確認されたことから古墳とした。周溝の形状から、主体部は墳丘の中央やや南に位置していたと推測される。古墳築造の時期は伴う遺物がないため明確でないが、第2号墳及び第3号墳と古墳群を形成していることから、第2号墳築造の時期と大きな隔たりはないと考えられる。残存している墳丘部は、石碑の年号から江戸時代後期には塚として信仰の対象になっている。



第5図 第1号墳出土遺物実測図(1)





第6図 第1号墳出土遺物実測図(2)

第1号墳出土遺物観察表 (第5・6図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	道祖神	52.8	22.4	12.0	2360	花崗岩	正面左下部「高柳・孫七」 右側面「天保十二世 正月吉日」 背面工具痕	TM1頂部	PL2
Q2	庚申塔	61.1	23.6	18.8	4670	花崗岩	「十九夜観音寺」 正面摩滅顯著 右側面「明治十四年二月」 背面工具痕	TM1頂部	PL2
Q3	道祖神	35.6	15.9	14.0	1370	花崗岩	正面右上部「□政・十 午」 摩滅顯著 右側面工具痕	TM1頂部	
Q4	石 鍾	13.6	7.4	4.7	235	凝灰岩	中央部に凹み 凹み石の転用々	覆土中	PL2

番号	器種	径	孔幅	重量	初年	材質	特徴	出土位置	備考
M1	寛永通寶	2.4	0.6	0.6	1668	銅	新寛永 無背文 銅一文銭	覆土中	
M2	寛永通寶	2.3	0.6	0.3	1668	銅	新寛永 無背文 銅一文銭	覆土中	

## 第2号墳 (第7～9図)

**位置** 調査1区のC1h5～D1b7区に位置し、標高3.6mの旧北浦の海岸砂丘に立地している。

**現状** 調査1区の北寄りにわずかな高まりを確認した。高まりの両側は、東側の道路と西側の民地境の塀設置の際に削平されている。

**規模と形状** 周溝内径が約13m、周溝外径が約16mである。周溝が墳丘中央を中心として弧を描くことから、円墳と考えられる。

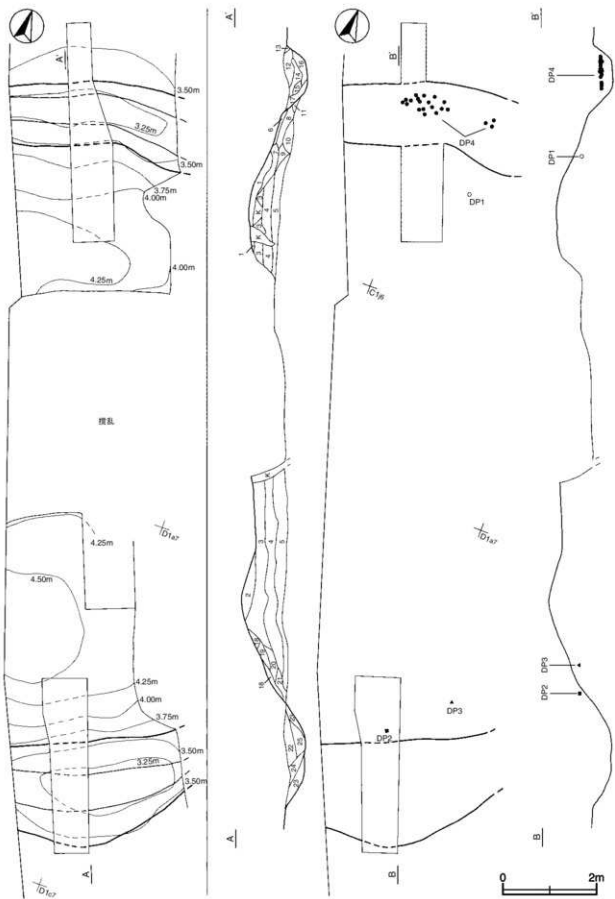
**墳丘** 本来の墳丘の状況については明確でないが、現丘の高さは約0.9mであり、墳丘中央部は攪乱によって削平されている。墳丘裾部は北側、南側ともにやや急な傾斜を示している。墳丘を形成している第3～5層は、砂を主体とする自然層である。第1・2層は墳丘上面の現表土であるが、元は墳丘構築の層と考えられる。第7～11層及び第18～21層は、墳丘構築の際の盛土層と考えられる。

**周溝** 上幅1.2～2.1m、下幅0.4～0.7m、深さ0.3～0.5mで、断面形は浅いU字状を呈している。南側の周溝はやや幅広でなだらかに立ち上がっているのに対し、北側の周溝は幅が狭く、立ち上がりも急である。平面形は、南側、北側ともに墳丘の中央部を中心として弧状を呈している。覆土は砂が多く混じる黒色土が主体で、墳丘や周溝外側から流れ込んだ土層も含まれている。

## 土層解説

1	褐色	砂多量、ローム粒子・黒色土少量	14	黒色	砂少量、ローム粒子微量
2	にぶい黄褐色	砂多量、ローム粒子微量	15	黒褐色	砂多量、ローム粒子微量
3	にぶい黄褐色	砂多量、ローム粒子少量	16	褐色	砂多量
4	黄褐色	砂多量	17	灰褐色	砂多量、ロームブロック微量
5	にぶい黄褐色	砂多量	18	灰黄褐色	砂多量、ローム粒子微量
6	にぶい黄褐色	黒色土・砂多量、ローム粒子微量	19	暗褐色	砂多量、ローム粒子少量
7	黄褐色	黒色土少量、砂微量	20	暗褐色	砂少量、ロームブロック少量
8	褐色	砂多量、黒色土中量、ローム粒子少量	21	暗褐色	砂多量、ロームブロック微量
9	にぶい黄褐色	砂多量、ローム粒子微量	22	黒色	砂少量、ローム粒子微量
10	暗褐色	砂多量、黒色土中量、ローム粒子微量	23	極暗褐色	砂中量、ローム粒子微量
11	にぶい黄褐色	砂多量、黒色土少量、ローム粒子微量	24	黒褐色	砂少量、ローム粒子微量
12	黒色	砂中量、ローム粒子微量	25	黒色	砂中量、ローム粒子微量
13	黒褐色	砂多量、ロームブロック微量			

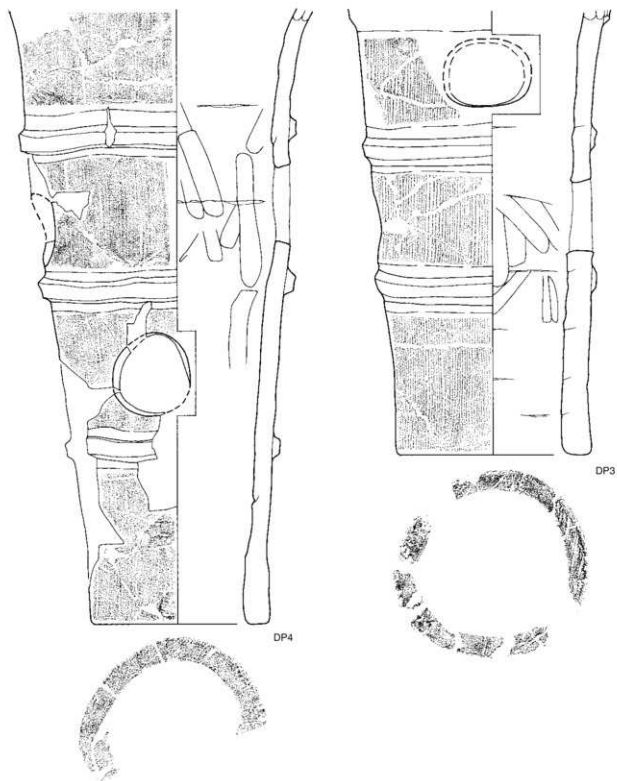
**遺物出土状況** 土師器片21点(甕)、埴輪片1,475点のほか、混入した縄文土器片1点(深鉢)、瓦質土器片1点(火鉢)、土師質土器片3点(器種不明)、鉄製品2点(不明)が墳丘中央部の攪乱土層から出土している。土師器片は細片で、周溝の覆土上層からの出土であり、周溝の埋没過程で混入したものと考えられる。DP1は墳丘の北側斜面中程から、DP4は北側周溝の覆土中層から出土した埴輪片がそれぞれ接合したものである。DP2・DP3は墳丘の南側で、DP2は裾部、DP3は墳丘の斜面中程からそれぞれ出土している。いずれも、古墳築造時に墳丘上に据えられていたものが流れ込んだものである。埴輪片の大半は、周溝の覆土中層に集中して出



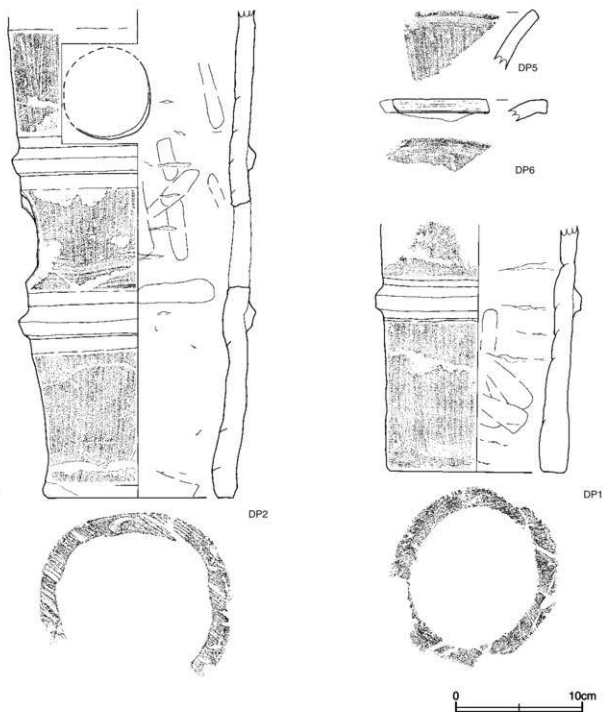
第7图 第2号墳实测图

土しており、周溝がある程度埋没してから流れ込んだものである。

**所見** 墳丘の土層が自然層であることから、墳丘は自然地形を利用して構築されたと考えられる。主体部は確認されなかったが、粘土や石材片の検出がないことから木棺直葬の可能性も考えられるが、明確でない。時期は、埴輪の形状から6世紀後半と考えられる。



第8図 第2号墳出土遺物実測図(1)



第9図 第2号墳出土遺物実測図(2)

第2号墳出土遺物観察表 (第8・9図)

番号	器種	口径	器高	底径	色調	特徴	出土位置	備考
DP1	円筒埴輪	—	(19.5)	13.6	浅黄橙	外面縦ハケ後凸帯貼り付け 凸帯断面台形 内面ナデ 穿孔あり	墳丘斜面	PL2
DP2	円筒埴輪	—	(38.6)	14.5	にぶい橙	外面縦ハケ後凸帯貼り付け 凸帯断面台形 内面ナデ 円形穿孔 穿孔軸直交	墳丘斜面	PL2
DP3	円筒埴輪	—	(35.2)	15.5	にぶい黄橙	外面縦ハケ後凸帯貼り付け 凸帯断面台形 内面ナデ 円形穿孔 穿孔軸直交	墳丘斜面	PL2
DP4	円筒埴輪	—	(48.6)	[13.7]	橙	外面縦ハケ後凸帯貼り付け 凸帯断面台形 内面ナデ 円形穿孔 穿孔軸直交	周溝中層	PL2
DP5	円筒埴輪	—	(4.7)	—	橙	外面縦ハケ後口辺部横ナデ 内面ナデ	周溝覆土中	
DP6	円筒埴輪	—	(1.7)	—	明黄褐	外面縦ハケ後口辺部横ナデ 内面ナデ 朝顔形円筒埴輪*	周溝覆土中	

### 第3号墳 (第10図)

**位置** 調査1区のD1f8～D1f9区に位置し、標高3.6mの旧北浦の海岸砂丘に立地している。

**現状** 調査1区の中央部に、1mほどの高まりを確認した。高まりの東側にあたる位置にトレンチを設定して掘り込んだところ、周溝を確認した。

**規模と形状** 周溝外縁の形状から、墳丘径が約11mの円墳と推測される。

**墳丘** 墳丘は調査区域外のため調査できなかった。周溝の土層に表れている第7・8層は自然砂層である。また、第1～3層は、墳丘を構築する砂が流れ込んだ層と考えられる。

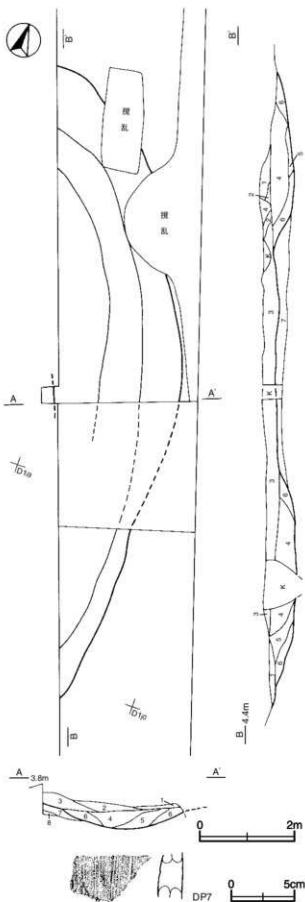
**周溝** トレンチによる調査で確認できた上幅は約2.5mであり、下幅0.6～0.9m、深さ0.4～0.6mである。断面形は浅いU字状を呈し、壁面は内・外ともなだらかに立ち上っている。覆土は第4～6層で、砂が混じる黒色土層であり、墳丘や周溝外側から流れ込んだ層である。

#### 土層解説

- |   |        |   |               |
|---|--------|---|---------------|
| 1 | 黒褐色    | 色 | 砂多量、ローム粒子中量   |
| 2 | 黒褐色    | 色 | 砂多量、ロームブロック微量 |
| 3 | 黒褐色    | 色 | 砂中量、ローム粒子少量   |
| 4 | 黒褐色    | 色 | 砂少量、ローム粒子微量   |
| 5 | 黒褐色    | 色 | 砂中量、ローム粒子微量   |
| 6 | 黒褐色    | 色 | 砂中量、ローム粒子少量   |
| 7 | にぶい黄褐色 | 色 | 砂多量           |
| 8 | 褐色     | 色 | 砂多量           |

**遺物出土状況** 埴輪片1点、土師器片10点(坏・甕)が覆土中から出土している。土師器片は細片のため図示できなかった。DP7は覆土下層から出土しており、墳丘上に並べられていたものが流れ込んだと考えられる。

**所見** 古墳築造の時期は、出土した埴輪片から6世紀代と考えられる。確認できた墳丘の土層から、第2号墳と同じく自然地形を利用して構築したと推測できる。このことから、第2号墳と第3号墳の築造の時期差は少ないと考えられる。



第10図 第3号墳・出土遺物実測図

第3号墳出土遺物観察表 (第10図)

番号	器種	口径	器高	底径	色調	特徴	出土位置	備考
DP7	円筒埴輪	—	(3.6)	—	橙	外面縦ハケ 内面ナデ	覆土下層	

表2 古墳一覽表

番号	位置	墳形	墳丘主軸 方向	墳丘規模 (m)		周溝規模 (m)			埋葬施設	主な出土遺物	時代	備考
				全長(径)	高さ	最大上幅	最大下幅	深さ				
1	B1a3~ B1c4	円墳	—	—	0.6	1.4	0.9	0.1~0.5	—	石碑、古銭	6世紀代カ	近世以降塚として機能
2	C1b5~ D1b7	円墳	—	13	0.9	2.1	0.7	0.3~0.5	—	埴輪、土師器片	6世紀後半	
3	D1f8~ D1i9	円墳	—	—	—	2.5	0.9	0.4~0.6	—	埴輪、土師器片	6世紀代	

(2) 溝跡

第1号溝跡 (第11・12図)

**位置** 調査1区のE1a0~E1b0区に位置し、標高3.5mの旧北浦の海岸砂丘に立地している。

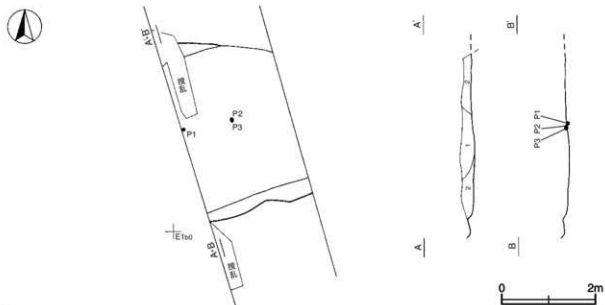
**規模と形状** 北側の立ち上がり部分や上層部は、擾乱を受けている。確認できた上幅3.8m、下幅3.3m、深さ0.2~0.3mで、長さは2.3mである。残存する部分から、断面形は浅いU字状で壁はゆるやかに立ち上ると想定され、底面はほぼ平坦である。調査区を横断するように東西方向に延びており、方向はN-72°-Eである。

**覆土** 2層からなる。レンズ状の堆積状況であり、周囲から流れ込んだ層を含む自然堆積と考えられる。

土層解題

1 黒色 ローム粒子・砂中量

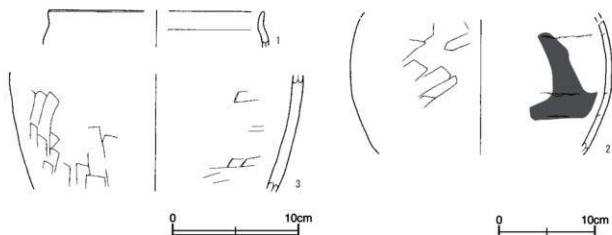
2 黒褐色 砂少量、ロームブロック微量



第11図 第1号溝跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片73点(坏・甕)が出土している。大半は細片で、覆土上層からの出土である。P1・P3は、底面中央部と覆土中から出土した破片が接合したもので、さらにP2も覆土中から出土した破片が接合したものである。いずれも、溝が埋没する過程で流れ込んだものと考えられる。

**所見** 時期は、出土した土師器片とその位置から、古墳時代後期には埋没が始まっていたと考えられる。溝跡の南側は自然の砂層であり、わずかに高まりも観察できることから、古墳の北側周溝の可能性はある。



第12図 第1号溝跡出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表 (第12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	鉢	[17.0]	(2.8)	—	長石 石英	橙	普通	口縁部内外面横ナデ	底面	5%
2	土師器	甕	—	(14.1)	—	長石 石英 赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り 内面ナデ 内面輝付着	覆土中	5%
3	土師器	甕	—	(9.3)	—	長石 石英	橙	普通	体部外面へラ削り 内面へラナデ	底面	5%



## 第4節 ま と め

調査の結果、古墳時代後期の古墳3基、溝跡1条が確認された。当遺跡は、これらの遺構から古墳時代後期の6世紀頃に墓域として古墳が継続的に築造され、古墳群を形成したことが明らかになった。ここでは、諏訪後古墳群の特徴と古墳群築造の背景について若干の考察を試みてみたい。

### 1 墳丘の構造

基本層序の項にも記載したように当遺跡周辺の地盤は砂層で構造されており、その層は標高2m以下まで続いている。現北浦の湖岸は、当遺跡の東方約300mに位置しているが、古墳時代の北浦（旧北浦）は「鹿島流海」や「入海」と呼ばれる内海であり、当時の海岸線が当古墳群のすぐ東まで達していたと考えられる。当古墳群は、この内海の海岸線に発達した海岸砂丘に位置している。

第2号墳は、土層観察から墳丘が自然の砂層で構築されていることが判明した。これは、砂丘の高まりの周囲を彫り込んで周溝を構築し、その高まり自体を墳丘の基部として利用する築造方法が用いられたためと考えられる。わずかに観察できた第1号墳の墳丘の土層からも、自然砂層を利用した築造方法であることが想定される。当古墳群は、海岸に発達した砂丘の高まりを利用して、墳丘部が築造されたと考えられる。

墳丘を砂層で構築した他地域の古墳として、三味塚古墳（行方市沖洲）が挙げられる。三味塚古墳は霞ヶ浦の東岸にあたる標高5mほどの沖積低地に位置しており、5世紀末から6世紀初頭の時期に比定されている。三味塚古墳の位置する沖積低地も、当遺跡と同様に旧霞ヶ浦の海岸であり、砂丘上に築造された古墳といえる。しかし、三味塚古墳の墳丘は砂層を中心として構築されているものの、その構築方法は段築状に砂を積み上げ、更に古墳全面を黒褐色砂質土で覆う手法である。石棺内外からの出土遺物も多く、被葬者はこの地方の有力首長とされている<sup>1)</sup>。この三味塚古墳と当古墳群を比較すると、海岸砂丘上に構築された古墳という点では共通するが、墳丘の構築方法が大きく異なり、当古墳群の構築方法はより簡素である。このことは、被葬者の権力の差や築造時期の違いなどが複雑に関連していると考えられ、当地域の有力氏族であった可能性を示唆していると考えられる。また、当古墳群から南西約2kmの山田川河口近くに立地するうなぎ塚古墳も、海岸砂丘にあたる低地に立地している。詳細については不明であるが、道路工事や宅地造成によって8基の古墳が消滅したといわれ、直刀や石枕が出土していることから、当古墳群よりやや古い様相を示している<sup>2)</sup>。当古墳群と立地環境が似ていることから、砂層で墳丘を構築していた集団の存在を想定することができるが、生活基盤や勢力域などについては不鮮明である。

### 2 周辺の津との関連

現在の北浦は南北に細長い湖であるが、中世以前は霞ヶ浦や利根川下流部および千葉県北部に位置する印旛沼や手賀沼までも含めた「鹿島流海」や「入海」と呼ばれる内海の一部であった。応安7年（1374年）の『海夫注文』には、この内海の海岸線に53か所の津が記されている<sup>3)</sup>。これらの津の多くは、その機能が古代にまで遡ることが可能である。

記載されている津のうち、当古墳群は鳴田津と山田津のほぼ中間に位置し、対岸には白鳥津が位置している。また、前述した三味塚古墳の南には羽生船津、うなぎ塚古墳周辺には山田津が想定されている<sup>4)</sup>。砂丘上の古墳の近くに津が存在することは、被葬者がそれぞれの津に対して勢力を有していたと考えられる。特に、諏訪後古墳群とうなぎ塚古墳の立地場所が同じ旧北浦の海岸砂丘上で近く、直接関連付ける遺物はない

ものの深い関わりが想定される。うなぎ塚古墳と山田津とは1kmも離れていないことから、この古墳の被葬者は山田津と密接な関わりを有していたと考えられる。また、鳴田津周辺の低地に当古墳群以外は確認されておらず、海岸砂丘上に古墳を形成した両集団は、山田津との結び付きが強く、時期的にも、うなぎ塚古墳から諏訪後古墳群へと墓域を移動した同じ系譜を示した集団の可能性が考えられる。

### 3 諏訪後古墳群の被葬者

諏訪後古墳群周辺には馬渡<sup>ウマワタリ</sup>という地名が残っている。現在は、当古墳群の東方に鹿行大橋が架橋されており、行方台地と対岸の鹿島台地とが結ばれているが、架橋以前は地名のように渡し舟が運行されていた。また、当地は現北浦が海峡状に幅狭の場所であり、水上交通の面でも重要な位置に当古墳群が位置している。

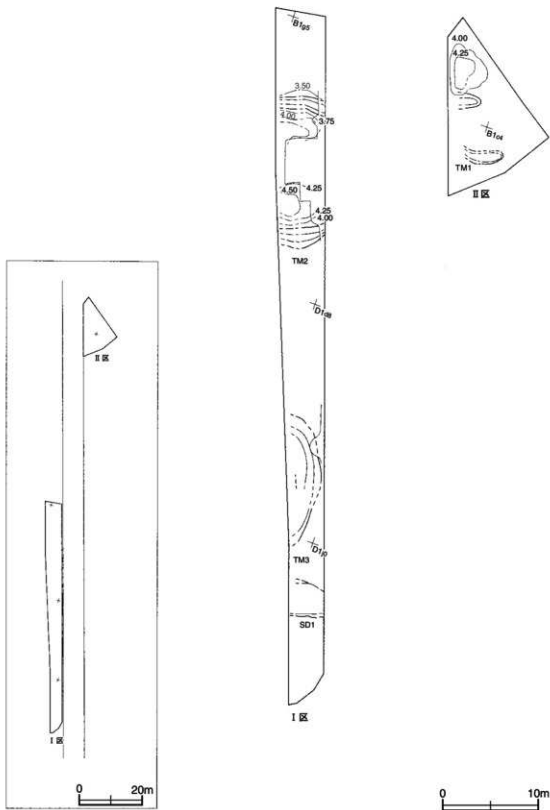
第2号墳から出土した埴輪片は、胎土がやや軟質や硬質という焼成の違いや、細礫を含むものや白色粒子を含むものなどの違いが認められる。この埴輪の胎土の相違は、製作地あるいは粘土採掘場所の違いと考えられる。第2号墳の埴輪は、胎土の相違などから複数の場所から運び込まれたとも考えられ、その輸送手段として水運も利用されたと考えられる。このような状況が想定されることから、諏訪後古墳群の被葬者は、山田津を中心とした水上交通に大きな影響力を有していた有力氏族と推定することが可能である。

#### 註

- 1) 石野博信 岩崎卓也 河上邦彦 白石太一郎編『古墳Ⅰ 墳丘と内部構造』『古墳時代の研究』第7巻 雄山閣出版 1992年4月
- 2) 北浦町史編さん委員会『北浦町史』北浦町 2004年12月
- 3) 土浦市立博物館『中世の霞ヶ浦と律宗』『土浦市立博物館第18回特別展図録』1997年2月
- 4) 註3)に同じ

#### 参考文献

- ・大塚初重 小林三郎 熊野正也編『日本古墳大辞典』東京堂出版 1989年9月
- ・「霞ヶ浦の首長 -古墳にみる水辺の権力者たち-」  
『霞ヶ浦町郷土資料館第19回特別展図録』霞ヶ浦町郷土資料館 1997年8月



第13図 諏訪後古墳群遺構全体図

## 写 真 図 版



1区 調査終了状況（北から）



第1号墳 確認状況



第1号墳 完掘状況



第2号墳 周溝完掘状況



第2号墳 遺物出土状況



第2号墳 遺物出土状況



第3号墳 周溝完掘状況



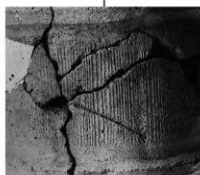
TM2-DP3



TM2-DP2



TM2-DP4



TM2-DP1



TM1-Q4



TM1-Q1



TM1-Q2



茨城県教育財団文化財調査報告第303集

## 諏訪後古墳群

一般国道354号道路改良事業地内  
埋蔵文化財調査報告書

平成20(2008)年 3月19日 印刷  
平成20(2008)年 3月24日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
T E L 029-225-6587

印刷 いばらき印刷株式会社  
〒319-1112 茨城県那珂郡東海村村松字平原3115-3  
T E L 029-282-0370